
3カウント～高校デビュー～

熊取

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3カウント～高校デビュー～

【Zコード】

N3159D

【作者名】

熊取

【あらすじ】

中学時代に投手として活躍していたが、いろいろあって止めてしまった一人の少年が周りの人に誘われてもう一度高校になって再開する。

・一旦切りがいいと思ったので区切ることにしました。
続きを読むからになるとおもいます。

プロローグ

今日は高校生になつてすでに1ヶ月が経つた日である。

この日も俺は普通に学校に行つてなんでもない様な事を友達としゃべつて、つまらない授業を聞きながら睡眠をとつて、最近慣れ始めている帰宅路で帰ろうと思つて教室を出て廊下を歩いている時に、「お～～い、ちょっと待つてーー。」と、一人の青春野郎に言われて、思わず待つてしまつてそのままなし崩し的な感じで巻き込まれてしまつと言つ大変可笑しなことからこの青春物語は始まつて行く。

これはあれよあれよと言つ間に巻き込まれてしまつた少年とその周りの人達によつて作られていくお話である。

第一話

ＺＺＺ・・・、う～ん・・・ん～～つ。

「こ」は何処だ、あ～つ学校か。何で誰もいないんだ? そういうえば6時間目の世界史の時に居眠りしたな、と言うか誰も起こそうとは思わなかつたのか? もう5時過ぎだぞ。はあ～～つ、いつまでも愚痴つてもしゃーねーし帰るか・・・・・・鍵は閉めないとな。

「失礼しました。」

ガラガラツ、

鍵も返したし帰るか。

スタッ、スタッ、スタッ

「お～～いつ、ちよつと待つてーーー」

なんだ、ん～～ユニフォームを見る限りじゃ あ野球部か?

「た、頼みがあんだけどさ。」

こいつはクラスでも話したことがあるが、いつもと全然違う感じなので心の中では結構焦つた。

「何だ?」

「じゃあ、单刀直入に言うけど・・・明日やる試合に出でくれないか！！」

ପାତା ୧୫୧ ପାତା ୧୫୨

いや、それがいいじやなくて、野球部で試合しやう。」

実は8人しか今居ないんだわ。

「じゃあ試合断ればいいだろ。」

「いや、断れないから困ってるんだよ。説明したら少しおこなでいいか」

「氣になるからせよ言へ。」

「でも、きも言つたよ。俺には試合できる人数じゃねえだよ。そんで何時もは一回戦で負けるようでも一様出場は出来てたんだけど。今年は出来なくなつたんだ。で、それを言いことに学校側が潰そうしてきたんだ。だけど俺らはそんなの納得出来なくて止めようとしたんだ。でも向こうは人数なんて関係なしに前から気に入つてなかつたらしくてな。それでもしつこく言つたらんとか練習試合をして実力を見てそれで決めるつて所まで今日妥協してくれた訳だ。」

長かつたなあ。もうちょっと長かつたら帰つてゐ所だぞ。

・・・まあ理由はわかつたけど・・・・・今日?」

「ああ30分前位に決まって、だけど俺ら8人しかいないから明日

だけでも出てくれる人を探そうって言つたんだけど、もう学校には部活してる奴しかいなくて途方にくれてた時にお前が廊下を歩いてたんだよ。」

まああんな時間まで普通の人は学校にいないよな。

「で、俺に声を掛けたと。」

「ああ、なあー頼むよ明日だナでも良いかから出てくんないかな」と、言つて頭を下げて来た。

はあ～～～つ面倒なことに巻き込まれたなあ。

「しゃ～ねえ。明日は特にやるいともないしこよ。」

「まじでかー！あつがとう。」

「だけどもつ今日はもつ帰るべ。」

「ああ、明日の事はまた後で連絡するわ。じゃあまた言つてくるから。バイバイ。」

そして、元気良く走つて行つた。

野球・・・か。

久しぶりだな。まあ、それなりに楽しませてもいいつか。

第一話（前書き）

少し長いです。

第一話

試合の場所は学校関係者が見やすいようにとの配慮で学校でやることになり、試合開始時刻は午後一時からに決まった。だが、試合前に練習もするので9時集合と言われて、今時間に合わせて学校に向かっているところである。

はあつ、何で俺まで朝っぱらから練習なんてやらなくちゃならないんだまったく。とは言つても特別扱いの方がやだけどな。それにしても勝てるなんかねえ。相手チームも弱いとはいっても毎年一回戦敗退の内よりは強いんじゃねえか?それにそもそも今勝てるぐらいなら部を潰す話も出なかつたんじゃないか?

等といろんなどを考えてる内に学校に到着した。
ちょっと早く来すぎたかな?まだ45分位だからなあ、誰かは来てるだらうしグラウンドに行つてみるか……。

グランドに付くと、予想通りに2人の人が居て一人は今日此処に来る原因になつた人物の 間野 で、もう一人も見たことはあるのだが、思い出せない。だが、少なくとも同学年で無いことはわかつた。話し掛けてみるか。

「おはよう、間野初めてまして俺は 森下 光です。今日は楽しんでやるつもりです。」

「うん。そうしてくれて構わないよ、それに、今日はありがとう来てくれて。僕たちも突然のこととかなり困つたんだよ。あと、紹

介が遅れたけど僕は主将をやらせてもらつていい 白岡だよ、よろしく。」

「あ～あ～、そうか、そうか、この人この前の部活紹介の時に見たんだ。それにしても、主将か、・・・まあこの人ならちゃんとやれそうだな。」

「ところで、利腕はどうちなのかな？あと身長はどれくらいかな？」

「左利きで、身長は170センチぐらいです。」

「じゃあ、僕は左用のグローブとユニフォームを取つてくるから。」

と言つと直ぐに走つていつた。

主将の姿が見えなくなるとほぼ同時に新しく2人の人がグラウンドに入つて來たが、多分野球部員だろうと思つて挨拶することにする。

「ちわ～す。今日だけの部員の森下です。」

すると、俺より背の低い方がかなりハイテンションでしゃべつた。

「よろしく～僕は一年生の瀬谷だよ～。」

それで、次に背の高い、と言つよりヒヨロイ方が

「ほ、僕も、・・・に、一年生、の、・・・相川、です・・・。」

とこひひどこひ言葉を切りながらしゃべつた。

「相川君はね～、かなり人見知りする人で～、初めてあつた人としやべる時はこうなるんだよ～。」

「あ～、そうなんですか。」

俺、そんなに疑問そうな顔してたかな～？つーかこの人今日かなりの人が試合見に来るらしいのに、こんな状態で大丈夫なんか～。あれ、今気付いたけどもう練習し始めてる人が一人いる。

「なあ、間野。向こうにいる人は誰なんだ？」

「あ～、あの人達か。先に走ってる方が一年生の羽村先輩で後ろの方が一年の竹橋だよ。ちなみに羽村先輩はかなり熱血的で今日は一年ぶりの試合だからって言って昨日から張り切つて竹橋はそれに巻き込まれてるんだ。」

確かに、そんな感じするなあ。竹橋の方はなんか嫌々やつてそこに見えるからなあ。羽村先輩には関わらないようにした方が良さそうだなあ。

「あ、また一人グラウンドに入ってきたやつが巻き込まれた。あれ誰だ？」

「あの人は三年の戸塚先輩だ。」

はあ～～～つ、あの人三年生までも影響及ぶんかよ。ヤバイなあ。俺とか普通に巻き込まれそうで少し恐いけどなあ。今氣ずいたけどもう集合時間越えてるなー。それにキヤ普テンも遅いなあ。

「おはよう!…」

「うわあつ。え～つ、とおはよう!」ざいます。」

先輩との接し方について考えてると、いきなり後ろから声を掛けられたのでかなり驚いた。

「あはははつ、ごめんごめんそんなに驚くとは思わなくてな。俺は一年の田崎だよろしくな光君。」と、言って部室の方に歩いていった。

「あの人はいつもあんなんなんか?」

「ああ、ジョークの好きなユニークな人だぜ。」

なんか個性豊かな人達だなあ。

「なあ、後は監督で全員か?」

「いや、多分監督は今日来ないんじゃないかなあ。面倒なことが嫌

いな人だから。それに一年のマネージャーがいるぞ。」

「ふ～ん、そうなのか。」マネジはいいとして、監督不在つて部としてビーなんだ。

「森下君ユニアーフォームとグローブ取つて来たけどそれでいいかな？もしいいんだつたら着替えて来てくれるかな。」

「はい、着替えてきます。」

服はまあまあだけどグローブは年期入つてゐるなあ。多分キャプテンが戻つて来るのが遅かつたのはこれを探してたんやろうなあ。じゃあ間野は俺の利腕知らなかつたんか。まったくそれぐらい調べとけよなあ。体育の時間以外に体動かすのなんてずいぶん久しぶりだなあ。体ちゃんと動くかな？

「おはよう。森下君だよねえ。私はマネージャーの永谷だよ。今日はありがとうございました試合に出てくれる事になつて。」

俺が部室から歩いて行つてグラウンドの前まで行つた時に声を掛けられたので振り向くと可愛らしい人が話しかけてきていた。

「まあ今日は俺も楽しんでやうつと思つてゐるし、それにかなり下手なことして逆に迷惑になるかも知れないから感謝すること無いと思うけど。」

「そんな事無いよ。」

「まあ兎に角感謝するなら終わつてからでも遅くないと思つよ。」

「フフフ、わかつた。そうする。」

「おーい！もう着替え終わつたんなら、仲良くなつてないで早くアップ始めるぞ。」

「はい！はい！じゃ、行つて来るわ。」

今はランニングを終えてストレッチをしている所である。
「羽村先輩達早いなあ。もうキャッチボール始めてるじゃねえか。」

「そうかあ、いつつもあんな感じだから。もつあまり気にならないけど。」

やつぱりいつもなのかよ、あの人はテンション高いのとか関係なくいつでも自由行動なんか。

「おい、間野キャチボールやるぞー。」「はい！…じゃあもうストレッチも終わるわぜ。」

間野は田崎先輩の所に行つた。

おいおい、皆もうキャチボールの相手も決まつてるじゃねえか。どうするか・・・おつ、一人だけまだいたなあ。話し掛けてみるか。

「なあ、俺キャチボールの相手いないんだけど一緒にやつてくれないかなあ。」

「え、私。」

俺が話し掛けたのはマネージャーだった。むちむちやんと右用のグローブも持つて、

「うふ、そう。あつてる、下手でも良いから一緒にやるわ。」

「本当に下手だからね。」とすねたような顔をしながら返事をして乱暴にグローブを取つて走つていった。

少し言葉が過ぎたかなあ。

シユ、パスつ・・・、シユ、ヒヨロッ、ヒヨロッ、パシ。シユ、パスつ・・・、

「ククックックッ。」

むつ、

「だから下手だつて言つたじやん。」

シユ、ヒヨロヒヨロ、パシ

「ごめんごめん。」

シユ、パシッ。

「でも、大分うまくなつてきてるよ。」

シユ、ヒヨロヒヨロ、パシ

「ほんとかなあ。」

シユ、パスッ。

「本当だつて、最初は投げ方とかとかが面白かつたもん。」

シユ、ヒヨロヒヨロ、パシ

「でも、今は様になつてきてるし。」

シユ、パシ。

「ありがと。うーん・・それにしても」

シユ、ヒヨロッ、ヒヨロッ、パシ

「何でそんなに森下君はうまいの?いつも構えてる所に投げてる

「じゃん。」

「シユツ、パスツ

「うーん、何でかなあ?」シユ、ヒュロヒュロ、パシ

「何でばぐらかすのかなあ。」

皆一、そろそろキャチボール終わりにして。

「終わりだつて。」

「教えてくれても良いじゃない。」

あらら、またすねてるや。

「じゃあ、少しだけ見せてあげるから。監には言わないでね。」

私は言つている意味が分からなかつたけど少し待つてみることにした。

「じゃあ、行くよ。」そう言つて、ネットに向かつて綺麗なフォームでボールを投げた。ボールはぐんぐんと伸びて行つて当たつて落ちた。

森下君からネットまではちょっとマウンドからホーム位は離れていたけどその間をボールは全く落ちなかつたと思つ位に伸びて行つたのだ。あんなに奇麗に見えるフォームも始めて見た。

私はなんだかわけが分からなくなつて

「行こう。」

と、森下君に声を掛けられるまで固まつたままでいた。

「次は守備練やるから、守備位置つけー。」
と、キャプテンが言つと皆は直ぐに動いて行った。

「なあ、間野。俺はライトだよな。」

「外野は全員つて言つても三人だけど、兎に角センターに行けばいいから、行こ。ばい。」

今は練習を終えて休憩時間になつたので間野と雑談をしていく。

「それにしても、お前つて結構野球できるんだなあ。」

「まあ、俺は運動神経が凄いからなあ。」

「うつわあー、お前そうゆうこと自分で言つなよな。」

「誰も言つてくれないから自分で言つてるんだよ。」

「でも、お前がそれぐらい出来て良かつたわ。」

「は？ 何で？」

「あんまり下手な事してたら羽村先輩が……て事になりそぐだからな。」

「おいおい、どうゆう事になるんだよーー。しかも、遠くを見る様な目をして青ざめながら言つなよ。それにしても人の人何をしたんだ？ 聞きたく無いけどな。」

「なあなあ、やつと思つたけどこのチームってピッチャーリーの

か？」

「ふむ。何故にそう思つ?」

「さつきのノックでキャプテンがマウンドで受けたけど、どうも動きがぎこちなかつたから。」

「ああ、確かにピッチャーはいなくてな。キャプテンがやり始めたのも最近だしなあ。」

「何で?」

「今年入つて来る一年生にピッチャーがいるんじゃないかと思つて練習してなかつたらしい。それに、中学までに一度でも経験があるのはキャプテンだけだつたんだよ。」

「おいおい、ちゃんと練習位しどけよな。あと、本当に試合大丈夫かよ。」

あまり関係無いとは言えかなり不安だなあ・・・。

「あつ、おい。森下対戦相手が来たぞ!」
そう言われてグラウンドの外を見ると何人もの人がいた。

「あれ何処の高校なんだ?」

「確か田中高校だつたと思つぞ。」

は〜〜〜つつ、なんだその一見平凡で覚え難そつて見えて印象に残りそうな高校は!?!?

「それで、其処はどれぐらいの強さなんだ?」

頭では名前の事にかなり触れたかつたが、今一番大事なことを聞けなくなる気がするから、其処は押さえる事にした。

「本当がどうかは知らんが戸津先輩によるといつも一回戦か二回戦で負けるどこで14人しか部員もいないらしいぞ。まあお願いして直ぐに試合受けてくれるような所だからなあ。」

「そりだなあ、強い所だつたら一日一日前に試合申し込んだところ

で断られるだらうからなあ。」

相手がアップをしてる間に、ひらは締めの練習も終わらせたので後は相手が終わるのを待つだけである。

「相手もそんなに強くはないみたいだけビ、一人凄いデカイのがいるなあ。」

「ああ、あのキヤチな。さつき聞いたけど、あれ俺らと同じ一年らしいぜ。」

「マジかよ！－あれ多分185はあるぜ。」

「それも凄いけどもつと凄いのがゴシカだな。何をしたらあんなムキムキになるんだらうな。」

「でも、まあそれよりもドンだけ観客いんだよ！－－どう見積もつても50以上はいるぞ！－それにあれこれからもつと増えるんだろ。」

さつきまでは全然居なかつたのだが相手チームの人達が来た辺りから段々と増え始めたのである。

「ああーもづ。あんま気にしないようにしてたのこへなんか緊張しきた。」

「そりだよね～～緊張しちゃうよね～～。」

「瀬谷先輩が言つとこマイチそうゆう風には見えませんけどねえ。」

“えがりかと並んで楽しんでる感じがするんだよなー。

「おーーーお前ら。緊張したからってHラーでもしたら許さんぞ。」
怖い、羽村先輩はやつぱめちやーええな。

「だつてさ。ミスつたらどうする？光ちゃん。
うつわつあつ、この人はー

「何でいつも背後から声掛けるんすかーーー他の人にはちゃんと
前からでしょーうが。」

「だつて一番反応が面白いんだもん。しょうがないじゃん。」「あ
ーはい、そうですか。じゃあもつそれでいいですよ。」

「おいーーーお前ら俺の話を聞いてたのか？！！」

「あーあーはいはい。聞いてまし・・・・・た、よ。」「あ
うつわー、やつべー田崎先輩の時と同じ様に言つちまつたー。

「ククククツ、クツ、クツ、はーつハツハツハツハ
こつええええーよ。ヤバイよ。

「いい度胸だな。試合楽しみにしてるからな。
この言葉だけ残して笑いながら歩いて行つた。

「どうしたらいいと思ひます、田崎先輩？」

「背中が冷や汗でいっぱいになつてゐや。

「俺は知らん。兎に角頑張つて生きろ、じゃ。」

クツソー、あの人逃げやがつた。で周りを見てみると、皆が少し哀
れんで見てる中で一人目をキラキラさせて見てるやつがいる事がわ
かつた。

「竹橋お前どうしたんだ？」

「すっげーす。あの羽村先輩にあんな事言えるなんて。俺なんていつもジクビクして言うこと聞いてるだけなのに。」

そういう事か。確かにこいつ良いように使われてるもんな。「いやそれは勘違いだと思うぞ。それにあの人は誰でも怖い。」

「勘違いなんかじゃないっすよ。あとこれからは師匠と呼ばせてもらいます。」

「そんな呼び方はするな。それから敬語は止めてくれ。」

「嫌です。」

即答かよ。言われるの解つてたみたいだな。

「諦める。お前はそういう運命なんだ。」

人事だと思いやがつて。

「元はと言え「もうすぐ始まるから集まれー」・・・・。」

そして、間野が肩に手を乗せて

「頑張れ。」と言われてもうどうでもいいや、と思つた。

5番	4番	3番	2番	1番	9番	8番	7番	6番	5番	4番	3番	2番	1番
一 中津	捕 村田	右 宮本	三 斎藤	中 志波	右 森下	中 間野	左 戸塚	三 田崎	投 白岡	捕 羽村	一 相川	二 瀬谷	遊 竹橋
左投左打	右投右打	左投左打	右投右打	右投左打	左投左打	右投右打	左投左打	右投右打	右投右打	右投右打	右投左打	相川	右投右打

田中高校

6番 遊 西村 右投右打

7番 左 森田 右投右打

8番 投 小山 右投右打

9番 二 渡部 右投右打

先行 後攻
田中 × 三越

「両チーム集合！…それでは田中高対三越高の試合を始めます。礼

！」

「お願いつしまーす」

「おめえら、行くぞ！…」「おうーー！」

何でキヤブテンじゃなくてあの人人が言つんだ？

「プレイボール！！」

第四話・プレイボール！！

「プレイボール！！」
の掛け声と共に先輩の足が上がり白岡先輩はスリークォータで右腕からボールを投げた。

初球はぎりぎり外に外れてボールで直ぐに二球目も投げた。
『キィイイーン』当たりは良かつたがサードの真正面でワンアウト。

次のバッターは真ん中近くに行つた初球を引っ張つてレフト前ヒット。

続く三番は初球は見送りのストライクでその間にランナーが盗塁で二塁に行つた。

（やっぱ、一ヶ月ぐらいいじやセットモーションまでは出来なかつたみたいだな。樂々と盗塁されてるからな。）

二球目は内角にボール一つ分ぐらい外れてボール、そして次の外角のボールを引っ張つた。

「ライト！！」

（もう、外角のボールは流せよ。）

ちゃんと打球は捕球したが内野にボールを返す時にゆっくりしていきたのでタッチアップをされてツーアウトランナー三塁でバッターは試合前に話していた一年の四番。

バッターボックスに立つて構えると普段より大きく見える。

（キャプテン大丈夫かなあ。）

そんなふうに考へてゐると案の定初球の真ん中近くの甘く入った力一球をジャストミートされボールはフェンスを越えて行つた。
(あつちあへ、いきなり一点も入れられぢやつたよ。それにしても随分呆氣なかつたな。)

次のバッターは四球目のボール球を引っ掛けでセカンドゴロでチエンジになつた。

「おーーーお前ら取られたもんはしじがねえ取り返せーーー」と言ひ言葉も虚しく三者凡退に終わつた。

「まだまだチャンスはあるからしつかり守れーーー」

「はいーーー」

(皆負けてても楽しそうでいいなー。俺も・・・・でもなあ。) 少しずつ何かが変わつて來るのである。

「野球部ーしつかり守れよー。」

(・・・・・・・・・・)

2回は先頭バッターにヒットを打たれて次のバッターがバントでワントナウト一塁とまたピンチになつたが次の8番をピッチャーボロに打ち取つて9番もカーブを引っ掛けでショートフライでチエンジになつた、

と思つたが以外と打球が伸びてレフト前に落ちるポテンヒットになつてツーアウトだったのでランナーが返つてきて二点差になつた。

続く1番はいい当たりをされたがショートがうまくさばいてこの回

も終わつた。

「キヤブテン気にするな。」

「取られたら取り返せですよ。」

一冊だ。」

（咄、本当に楽しそうだなあ。）

「おいおい、野球部大丈夫かよ。こっちの攻撃はそつこ一で終わつ

卷之三

卷之三

(· · · · · · · · · · · · · · · · · · · クツ)

この回は先頭バッターの羽村先輩がヒットで出塁したが後続を抑えられて1点も入らずにチエンジになつた。

「校長先生やつぱり野球部は廃部になりそうですね。バツクネット裏である生徒が校長に言った。

「そりですかね。まだ2回しかやつてませんよ。」

「わかりますよ。だつて過去の成績を見てもほとんど勝つためしないですか。」

「ねぎわざ調べてくれたんですか？」

「Jさんこと、Jの学校の人ならだれでも知っていますよ。」

「でも、皆まだ全然諦めませんよ。まあ終わつたら分かりますから、最後まで付き合いましょう。」

そして、試合は次の回から少し予想してなかつた結果になつていくのだった。

この回先頭の2番バッターにいきなり不意を突くセーフティバントを食らつていきなりノーアウトからランナーを出してしまつた。

そして、キャプテンは盗塁を警戒しすぎて真ん中付近にボールを投げてしまい左中間へのタイムリー・ベースを打たれてしまつた。

（これで4点差か。次取られたらヤバくなるぞ。）

そして、内野陣はタイムを掛けて話し合つてゐる。

（どうすんのかな、Jのタイミングで話すことつて言つても勝負か敬遠かだらうしなあ。）

「もうこれじゃあ無理だろ、終わりだな。」

「確かになあ。」

「なあ、Jの回終わつたらどうか遊びにJ一ぜ。」

（…………はあ、俺って忍耐力ねえなあ。あいつの頼み聞いた時からじつなるとは思つてたんだよなあ。）

side 内野

「おこ、どうするよ。次取られたら厳しいぞ。」

「このタイムはおのれをどうするかってことか？」

「やつだ！！」

「お前は少しボリュームを落とせ。一々喧しいんだよ。」
確かに羽村の声は相手のベンチまで聞こえて行きそつなくらい大きく、近くにいるものはたまたものではないだらう。
田崎はこの中でも一番羽村を嫌っているので注意をした。

「何だと貴様！！」

「当然、羽村は怒る。」

「だから、喧しつて言つてんだよ。」

「ふ、2人とも、お、落ち着いて。」

「そ、そうですよ先輩。」

このままでは流石に拙いと思つて相川と竹橋が2人を止めよつと声を掛ける。

「うーん、僕はねー、キャプテンが決めたらいいと思つたなー。」

瀬谷に至つては、一人が言に争つていて2人が止めようとしてるのを田の前で見ているがもう無視してキャプテンに話し掛けている。

「…………僕が決めるんなら、ここは一墨あいてるし歩かせるような感じで厳しいといふを突いて行つた方が…………」

「本当にそれでいいんですか？キャプテン。」

その言葉を聞いて、羽村の事なんてどうでも良くなつて話しの途中で思わず声を挟んだ。

「…………う「それはそれで不味くないですか？それに、そんなことしたら観客全員帰っちゃいますよ。」…………」

「やつだな、今でさえ…………」

「ああ、少しまずいな。それにあいつはまだ…………」

「つーん、うだよねー、光君。」

「「なぜお前がここにいる。」」

いきなりここにいるはずのない人物が普通に話し掛けて来て直ぐには氣ずかなかつたが、冷静になつてみるとかなり違和感があることに氣づいて、ほぼ2人同時に言葉が出た。

最も、瀬谷にはそんなこと関係ないみたいだが。

「それは、やっぱ話しがこじめられたからでしょ？」

「いや、いや。俺に聞くなよ、てかお前外野からわざわざこいつが
で来たのかよ。」

「当たり前でしょ、何言つてんですか。…………それ
で、どうするんですか？キャプテン。このままだつたら何回も試
合が終わつてそつなんですが。」

「こひで話しきを本題に戻すことにした。」

「…………僕は四球でも良こくらこで行ひりと黙つてゐ
るんだ。」

その答えを聞いて少しづつから言つた。

森「…………もうですか。あの、皆さん
には悪いんですけど、ちょっとだけ羽村先輩とキャプテンと話したい
んですけど…………」
それを聞いて、意外にも直ぐに白岡はわかつた、と言つと3人を残
して守備位置についた。

「話しつて何だ？」

「先輩はキャプテンの球で抑えられると思こますか？この回だけの
話しじやあなくて。」

「…………無理だな。」

「でしょ、このまま黙つてやられたくないんだつたら賭けに出てみ
ませんか？」

「…………やひこひこひだ。」

「見ず知らずの俺にやられさせてみませんかってことです。」

羽村は驚いたが、白岡の方は全く驚いたようなそぶりは見せなかつた。

「はい、大丈夫です。」

「じやあ、頼んだよ。」

由岡は笑つてそう言つて、審判の方に行つた。

「おい……お前、

「しっかりやれよ。点取られたりしたらただじゃおかんぞ。」
「えへよ。全くキャプテンみたいには言えんのかよ。」

それから、守備の交代をキャプテンが告げて森下はマウンドに、白岡は外野に行つた。その時、田崎が何か言つていたのだが、森下は無視して投球練習を終わらせた。

やつと一人で落ち着けたな。

〔 パレード 〕

おしゃ、『 気合 』入れていいくか。

第四話・プレイボール！！（後書き）

更新が少し遅れました。

済みません。

森下はセットポジションに入りながら思つた。

此の一瞬に何とも言い難い高揚感を感じる。最初の一球と最後の一球の時の瞬の静寂。

足を上げて相手を見る。

最初からになしか

足をおろしながらニコッと笑つて、セットからなのは少し残念だけ
どやっぱ最初の一球は・・・・・・・・・・・・

キヤツチャーミットをめがけて腕を振り切る。

ボールは綺麗なバックスピンがかかりながら、
ツトに収まつた。

「……………」真ん中でしょ、ちひる。

「ストライーケッ！！」

審判の掛け声とともに野球を見ている人達が騒がしくなった。
まだ一球投げただけなのに凄いなー。

ああ、次はどうすつか、・・・・・・・・・よし。

森下はセツトに入ると速いテンポで一球目を投げた。

ボールは内角低めに進んでいき、またミシトに収まるかに思えたが、今度はおもいつきりボールを強振した。ボソッ、（ショート）

ボールはショートの定位位置から少しセンターよりの所にライナーで飛んで行き、竹橋が左手を伸ばして地面に着く前に捕球し、ランナ一はうまく反応できずに、ショートがタッチしてゲッターになつた。

あつぶね～。打たせて取ろうと思つてしかも、思いどおり打たせてヒットとかなりかつこ悪いし何より、・・・・・・・・・・・・・・羽村先輩に何されるか分かったもんじやねえよ。）

皆がショートの竹橋に声援を送つたが、その中でも森下の声は一際大きかつた。

村田「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ナイスピッチ。」

次のバッターは一球目の外角低めのボール球を引っ掛け、この回は終わつた。

森下は意氣揚々とベンチに戻つたのだが、待つていたのは、「お前！…自信満々に言い切つといて冷や冷やさせてんじやねえ！」怒鳴り声だった。

まったくもつてその通りですね。これについては何も言い返す言葉
がありません。

「そうだぞ！！それに何でこんな大事なことなのにあの時わざわざ
俺らを返してから決めやがったんだ！！。」

はいはい、分かってましたよ。ええ、分かってましたともそのこと
を聞かれることはだつて一番何か言ってきそうなのが羽村先輩とあ
なたで羽村先輩とはどのみち話さなきやならなかつたけど、先輩と
は絶対じやなかつたからです。簡単に言うとあなたが邪魔だつたか
らみんな返したんですねー。とか、言つてみてー、つかこの一人マジ
でどうするよ。

そんな事を考えていたら、天からの助けがやつて來た。

「森下君は次のバッターでしょ、早くネクストに行かなきや。これ
バットとヘルメット。皆も話す暇があるんだつたらピッチャーでも
見るなり他の事に時間使つて。」

キヤプテン、ホンツトーにありがとうございます。

次のバッターは、間野か。なんとかして壁に出てくれよ。そしたら
俺が何とかするから。

素振りを見るだけだけど、バッティングも出来るみたいだな。
正直俺は今日の試合なんて本気じやなかつたし、あいつにだつて断
られても構わなかつた。

けど、なんかこのままじやいけない氣がするんだよな。
大げさに言つてみたらこんな場面でやる氣が起きないなら、もう一
生何も掴めないような氣が。ホントに少し大げさだな。でも、今は

間野は初球から思いつきり振つて行つたが、初球はボール球を、二球目はカーブをかなり見当違ひの所を振つて空ぶつてしまい早くも追い込まれてしまった。

くそつ、当たる気がしねえ。俺中学の時からろくにヒットなんて打つたことも無かつたし、・・・・・・

「間野!! 落ち着け、兎に角当てる!!。」

・・・・・・・・・・・・ そうだな。ヒットなんて打てなくともいい。兎に角してやる。

間野はバットをグリップいっぱいまで持つてバットを構えた。

3球目は直球をなんとか掠りせてキャッチされ、川を取れ捕ねてファールになり、続く4球目はボール次も外れてカウント2-2となつた。

そして、5球目のカーブを引っ掛けた。

だが、打球の方向はサークル方向とよく、当てただけなのでボールも転がっていかず、結局間一髪のところで間野がボールより先にファーストベースに走り着きターフにならず。

「ナイスチー。」「いいぞ！」「続け続け。」

よつしゃー、ナイス間野でかしたぞ。

あれ、そういうサインとかつてあるのか？

一様見ておくか。・・・うわー、何かキャプテンがサインっぽいの
出している。どうじよ、いや待て待て落ち着け。・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「タイム。」

そんな訳に行くか。

そして、キャプテンに聞いたところサインは一様出しているだけで
俺は気になくていいと呼ばれた。

「プレイ！――」

森下はゆる〜く構えていたので初球は見逃すものだとバッテリーは
思い打順も9番といふこともあって真ん中に投げた、が甘かった。

ど真ん中以外ならそのまま見送っていたが、何とも予想通りに投げ
てくれたのでこの球を右中間に持つて行つた。

このグラウンドは結構広くてボールがよく跳ねるので奥の方まで転
がつていき聞野は悠々とホームに帰つて来て、森下は無理する場面
でも無いので3塁で止まつて4・1と3点差になつた。

「ナイスバッティング！――

「いいぞ――！」

やつぱり点を入れると声の掛けられ方が違うよなー。

次のバッターはトップに代わって2回り目の竹橋である。

まだ序盤で3点差も付いているという事もあり、守備は定位置から少し前に出た形になった。

相手チームのピッチャーは今不用意に打たれたこともあって少し慎重に投げようと心掛けていたのだが、少し気にしそぎたのかストレートのファー・ボールになってしまった。

ピッチャー大分焦つて来てるな。

2番バッターは瀬谷先輩で、この人は身長が低いにもかかわらず構えもコンパクトにまとめているのでストライクゾーンがかなり狭い。だが、ランナーは一番なのでバッターにだけ気を取られる訳にもいきず、結局ランナーの方もバッターの方に対する注意も散漫になってしまって、竹橋はチームの足を生かして盗塁を仕掛けて瀬谷が外角高めの甘いストレートをうまくライトに流し、竹橋は二塁まで走りランナー1・3塁でまだホームアウトの2点差になった。

森下はベンチに帰つてみると直ぐに間野と一緒にブルペンに入った。

「皆よく打つなー。・・・・ボテボテの当たり打つたの俺だけじゃん。」

「ハハツ、贅沢言うなよ。ヒットだつたんだからいいじゃん。・・・・・それよりも座ってくれ。次の回からは変化球も混

「ぜりきたいんだ。」

3回はストレートだけしか使っていない。

そして、森下が言うにはストレートだけだとそんなに特別スピードがある訳じやないので2回り目からは目が慣れて打たれ始め、何より疲れるので変化球で打たせて取っていきたいらしい。

「じゃあ言われたとおり適当にストレート、スライダー、カーブのサイン出していくからな～。」

「ああ、頼むわ。・・・・・おつ、相川先輩飛ばしたなー。」

ギリ追いつかれてアウトになつた。最もその間に2人とも進塁してあと1点差でまだチャンスの場面となつた。

次のバッターは4番で最初の打席からヒットを打った羽村先輩だ。この人は他のメンバーとは違つて中学の時に地元でだが、名の通るほどのバッターで期待大である。

それにピッチャーは簡単に1点差に詰められそのまままだピンチを背負っているのでかなり参つて来ているのだが、キャッチャーはキャッチャーでまだ1年生といふことと森下のピッチングが気になるらしく、間をとると言う事もせずに構えに入った。

相手は大分焦つていたらしく、初球から内角の少しど真ん中寄りに投げてしまい羽村先輩にその球をかっ飛ばされた。

球はぐんぐん伸びて行つて、
を越えて行つた・・・・。

羽村先輩はいつもと違つてクールに黙つてダイアモンドを回つて来てそのままベンチに帰ろうとしたのだが、その前に田崎が現れてえーい、と言いながらヘルメットをバットで結構生きよい良くこじいた。

そんなことをされてもうクールになんていられる訳もなくキャプテンも今はバッター・ボックスにいて、誰も止める人もいなく田崎が笑いながら逃げるのを叫びながら追いかけてどこかに行つてしまつた。

相手も流石に少し冷静になつたらしくキャプテンをショート「ロロ」に打ち取り、続く田崎をアウトにして、この回を終えたが一挙に5点を取つて逆転した。

竹橋「田崎先輩いつ戻つて来たんだ? それに羽村先輩も?」

此処から森下は8回までを打者20人を相手にヒット3本、四球2つ、三振4つと順調に抑え、対する相手はランナーは出す者の最低限の失点にしたので2点の追加点を加えられ3点差で今最終回4番バッターでツーアウト1・2塁の一本ホームランが出れば逆転の場面を迎えた。

ふう、楽しいけどやっぱリピッチャーハは疲れるねい。

そんでこの場面ちょっと簡単にツーアウト取つたからつて油断は禁

物だな。

でも、ほんと疲れたな。

久しぶりつてのもあるけど、あの時以来全然体動かしてなかつたからなー。

そして、第一球は外角低めにストレートを投げ、バッターはこれを強振したが、ボール一個分外れていたので、ファールになった。

へへつ、にいねえやつになへつちや樂しめなこからな。

二球目を投げる時、バッターに集中していたのでランナーの事など頭になくダブルスチールを掛けられ、バッターはワンバウンドしたカーブを空振つて、ツーアウト2・3塁ツーストライクあと一球となつた。

観客席では歎があと一球ノールをしている。

あら、いつの間にか大分人数増えてるな。

何人いるんだ、そつか皆部活の服着てるから部活の人か増えたのか。
あーあ、俺結構今まで地味にやつてたんだけどな。

一度息を吸い込み、大きく吐きだした。

森下は大きく振りかぶつて三球目の球を投げた。

指から離れたボールは今までとスピード・自体に変わりはないが、伸びが違つた。

ボールはほとんど沈まずにキャッチャーミシトに収まった。

そして、三振した瞬間に静かに左手を天に向かつてあげた。

「ワウアア――――――。」

その瞬間に誰かが口火を切つてそのあと観客が一斉に盛り上がった。

野球部は整列をして皆で礼をする。

「ゲームセツト――」

試合は三越高校の勝ちで終わつた。

第五話・初登板（後書き）

この次の回からは少し試合からは離れた話になりそうですね。

第六話・祝勝会

試合が終わった後は結構ドタバタした。

まず、直ぐにキャプテンが先生に呼び出されていなくなってしまった。

多分今後のことだらう。

次に、観客が騒ぎ出してしまった。

わーっわーっ、といつまでも煩くしていたら遂に羽村先輩がきれいでダウンの途中で観客の方に突っ込んでいつたり。

その後、柔道部と激しい戦闘を繰り広げたらし。

少し静かになると相手チームは帰つて行つたのだが、村田といつ一年の子がそのとき俺にライバル宣言とかをして来たり。

俺はちやんと望むところだつて言つておいたけどな。

そして、ストレッチが終わり一息入れようかと休んでいると報道部が取材にやつて来て俺ばかりに聞くので田崎先輩が暴れ出して皆で止めたりと後いろいろな事がたくさんあったのだが、兎に角楽しかった。

・・・・・

今はキャプテンがやつと解散を告げて、お祭り好きの田崎先輩の提案の祝勝＆部の存続会の最中である。

会といつてもそこは学生なので某バーガーチーン店で行われている。いちよう先輩が奢ってくれるらしい。

俺が羽村先輩が竹橋を攻撃して、田崎先輩が相川先輩で遊びだしたのを横目に眺めていると、同じようにそれを見ていたキャプテンが俺の方に歩いてきた。

「いつもあんななんじゃ大変ですね。」

「そうでも…………あるかな。でも、楽しいから構わないんだけどね。」

すると、キャプテンがこの店の中のマークとは少し違つ真剣な表情になつたので、俺はそれにつられて姿勢を正した。

「…………今日はありがとう。助かったよ。」

そう言つと、キャプテンは頭を下げたので森下は少し焦りながら言った。

「頭なんて下げないで下さい。周りの人に見られたら絶対俺良い印象は持たれませんから。…………それに、俺が詰まんない意地はつたりせずにもっと早くにマウンドに昇つてたら皆が観客に馬鹿にされることもあつませんでした。」

キャプテンはそれを聞くと直ぐに顔をあげると、笑つて言つた。

「そんなことないよ。何でもうと早く?とか思わなくもないけど、…………皆、君には感謝してるよ。…………だから、皆の代表としてもう一度だけ言わせてもらうよ。…………今日はありがとう。…………まだ話したい事はあるんだけど、もうそろそろあの一人を止めないと追い出されちゃうだからこくよ。フフシ、キャプテンは大変だよ。」

「…………ホントに、良く出来た人だな。」

あの一人には少しでも見習つて欲しいんだけど…………。

そして、一人になつた彼の所に今度はマネージャーの永谷がやつて來た。

「…………今日はお疲れ様。」

何を言おつか考えた結果この言葉が無難だとの事で選ばれた。

「ははっ、確かに結構疲れたな。もう半年以上も真面目に運動なんてしてなかつたのにいきなり7回も投げたんだもんな。」

何気なく肩や足の筋肉を触つたり動かしたりしながら答えた。

「それでも無失点だつたんだから凄いよね。」

「そうでもないと思うけど…………だつて最初の方はまだ良かつたけど終盤に入つてから急にコントロールも球のキレも悪くなつたし、失点してなかつたのは皆の力の部分も関係してたよ。でも、もし点取られたりしてたら俺羽村先輩に何されてたか分かつたもんじ

や無かつたなあ。・・・・本当に良かつた。」
しみじみとそう感じた。

「・・・ほんとに凄いね。一日あの人があそこまで言つようになつた事は今まで無かつたと思うよ。それに・・・・もひづつと前からチームに入つてたみたいに馴染んでるんだもん。」
嬉しくねーな。・・・・田崎先輩も一日で、いや恐らく直ぐに喧嘩し始めたんじゃないかと思うけどな。
考えてみたらおかしな話しだよな。昨日までホントに歸つた事無かつたんだから。

「俺、今はこんなだけど投げてる時は結構カッコ良かつただろ。・・・自分で言つのもあれだけど。」

少し空気が重い感じだつたのでこんなことを言つたのだが、言つてるついに恥ずかしくなつてしまつた。

「・・・・・うん。今まで見て来た人の中で一番。プロは抜いてだけね。」

当たり前だ。プロと比べられても困る。特に、

「・・・・・・・・・・英昭選手とか。」

「・ツ！知つてゐる。」

俺が何となく呴いた名前に永谷は素早い反応を見せた。

おそらく頭に思い浮かべた選手が一緒で珍しかつたからだろ。どうか、あの人か。それなら俺が勝てる訳ないな。

「知つてるも何も、俺はあの人のがいなかつたら多分ピッチャーやつてないし。それに氣づかなかつたのか？俺のフォームはあの人をそ

のまま真似てるんだぜ。」

その人を知ってる人がいるとはな。今まで誰に話しても全員知らな
いって言うから誰も知ってないんだと思ってたけど、こんな身近に
いるとは思わなかつた。

「先輩おかわりお願ひしまーす。」

「お前少しさは遠慮しやがれ！！」

俺は自分の食べ物がなくなつたので貰いに行つた。
このあと永谷は少しの間座つていたがそのあとは脇に交じついていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3159d/>

3カウント～高校デビュー～

2010年10月18日19時40分発行